



◆アメリカで訪問した在宅ホスピスに衝撃

大学卒業後、公認会計士として大手会計事務所勤務していましたが、その後同会計事務所が設立したヘルスケア業界に特化したコンサルティング会社に3年間勤務した後、渡米して米国大学院にてビジネス一般と病院マネジメントを学びました。

この留学中、米国の様々な施設を見学しましたが、なかでも在宅ホスピスを見学した際、強い衝撃を受けました。患者さんが最期まで自宅で自分らしく過ごせる素晴らしさと、そこで働いている従業員が皆いきいきと仕事をしている姿に感動し共鳴したのです。

◆日本で在宅ホスピスを起業したい

永い間病氣と障害を持っていた父が、どんなに状態が悪化しても自宅で過ごすことを強く望んでいました。それを肌で感じ続けて育ち、自宅にいた父と一緒に時間を長く持てたことが、今の私に大きな影響を与えてくれました。

私は今42歳ですが、今後の人生をこの在宅ホスピスを起業することで、自分が大切思っていることを、世の中に広めたいと思いました。儲かるとか、需要があるとかではなく「人間として人生をかけるだけの価値ある重要な仕事である」と強く感じて、この事業を選んだのです。

◆帰国後3年余の準備期間を経て起業

2007年に米国留学から帰国し、起業に向けての準備を始めましたが、この新しいビジョンに賛同してくれても、仕事としてやっていくのは無理ではないかと、実際に一緒に働いてくれる人がなかなか見つからず、夜も眠れぬ日が続きました。しかし当初から、心から信頼できる仲間が一人だけいてくれたのが救いでした。私の燃えるような情熱とこのビジョンを絶対に実現できるという信念をもって3年余りの周至な準備をしてきました。そして、平成22年5月、横浜市関内駅前に「ホープ訪問看護ステーション」をようやく起業することができました。



◆在宅ケアの現状と在宅を希望する理由

一昔前は在宅で死を迎えるのが普通でしたが、1980年を境に病院で最期を迎える人が大幅に増加しました。核家族化や医療の進歩などにより在宅ケアより病院でという風潮が広がりました。一般国民で在宅療養を希望している人は23%で、在宅療養は無理とあきらめている可能性があります。一方で医療従事者は40%が在宅療養がよいと回答しています。

在宅ケアを希望する主な理由は「住み慣れた場所で家族に看取られて最期を迎えたい」、「最後まで好きなように過ごしたい」、「家族と過ごす時間を大切に」などです。在宅が無理と考える理由は「家族に負担をかけたくない」「緊急時に迷惑をかける」などでした。

◆厚生労働省の取り組み

超高齢社会になって医療や介護の現場はその対策に苦慮していますが、平成18年度の医療改革により厚生労働省も在宅ケアの推進には新たな取り組みをしています。団塊の世代が後期高齢者になると病院や施設が不足するため、多様なケアの選択肢が必要になると考えられます。

◆在宅ケアを可能とする条件

在宅ケアを可能にする条件は①ご本人の意思、②ご家族の意思、③ご自宅の環境、④医療・看護サービス、⑤地域在宅ケアシステムです。

今後この地域在宅ケアシステムが各地に広がり、在宅ケアが可能になる社会になることを願っています。小規模で始めた私の会社ですが、皆様のアドバイスを受けながら拡大できるように頑張りたいと思っています。